

# ひょうご・らんな―ず

## ―未来への道普請



### ひょうご・らんな―ず ―未来への道普請

子どもの数が減る。人口全体も減る。その少なくなる人が神戸や阪神、さらには大阪や東京に集まり、農村や漁村では、森や田畑の手入れ、神社やお寺、祭りの世話ができなくなる。都市部でさえも、お年寄りの孤独死が増える。非正規雇用の人たちの生活は苦しく、経済全体をも縮ませる。

戦後の荒廃の中から立ち上がり、がむしやりに進んできた私たちが望んだのは、こんな社会だったのでしょうか。確かにたいがいのモノは手に入ります。困っていれば助けてくれるしくみも整ってきました。でも何かおかしい。私たちはもつと違う何かを求めていたはず。何がおかしいんだろうか。わからない。

でも、誰かきつと答えを知っているはず。一人ですべてを知っているスーパーマンのような人はいなくても、多くの人の話を紡いでいけば、何かわかるかも。

そんな考えから、道なきところに道を作りながら走り続けている人たちを訪ねることにしました。それは希望という名の原石を巡る小旅行でもありました。希望は、未来が見えなま過ぎても、逆に見え過ぎても言たない、扱いにくい花のようなものかもしれません。トップランナーの語りから、そんな希望の小さな芽が心に生まれればと願っています。

## 目次

海崎 孝一（神戸市東灘区甲南本通商店街）	一〜二
増田 大成（NPO法人ひょうご農業クラブ理事長）	三〜四
大封香代子（養父市建屋手づくりパン工房「こうめや」店長）	五〜六
細川 大介（朝来市生野町奥銀谷地域小規模集落サポーター）	七〜八
君塚 昌俊（NPO法人いちじま丹波太郎事務局長）	九〜十
森 義政（東浦森漁業協同組合代表理事組合長）	十一〜十二
山口久仁子（NPO法人淡路島アートセンター理事）	十三〜十四

### 地域は家族。地域で歴史を積み重ねていきたい

海崎孝一さん

（神戸市東灘区甲南本通商店街）

「甲南本通商店街」は、神戸市東灘区にある兜（カブト）をかたどったアーケードが特徴的な商店街です。阪神・淡路大震災では店舗の約八割が全壊する等、非常に大きな被害を受けました。十年間の復興の過程では、周辺住民の半数近くが入れ替わったと言われています。

地域に愛される存在となるべく積極的に行動されている、甲南本通商店街の海崎孝一さんに商店街活性化の取り組みの苦労、地域との関わり、今後の目標などについてうかがいました。

### なんで商店街活性化に取り組みはつたんですか

阪神淡路大震災は二十五歳のとき。そのときに人生は残り半分や、残りの人生をここで商売して生きていくんやと決意したんです。

当時、商店街は親父連中のつながりはあるんやけど、自分らの世代はあんまりつながりがなかったから、みんなで晩ご飯を一緒に食べるようにしたらつながりができてきた。その仲間が商店街の活性化何かやってみよかと「スタンプラリー」をしたらこれが失敗。今でも忘れられへん「卵のパック」事件ですわ。

### 「卵のパック事件」って何ですか

「スタンプ」を集めると「卵のパック」を無料で渡すことにしたんです。スーパーの特売で卵を百円で売ったら千パックは半日でなく

なると聞いたんで、無料やからすぐなくなる、奮発して二千パック用意した。ところが二千パックをばくのになんと二日もかかって、それも最後は何とかお願いして持って帰ってもらおうような感じで。

なんで、二日もかかったんや、大学の先生にきてもらって調べてもらいました。そのときに、はじめてこの地域がわかった。卵はただでもらうもんやない、上流意識とまではいわへんが、卵は買うものという意識がこの地域では強いことがわかったんですわ。地域とはこういうことなんや、地域を知って動くことが大事やとそのときに、改めて思っただけです。

### 地域との関わりは どうですか

まちづくり協議会や婦人会などイベントがあつたらとどんどん顔出して、テントの設営から皿洗い

まで何でも手伝いました。それを十年ぐらい続けていたら逆に地域の方が商店街のイベントを手伝ってくれるようになったんです。商店街の自転車置き場やトイレの問題など一方的にこうしてくれと言われることが多いようやけど、ここはちがう。地域の人と一緒にどうしたらええか考えてくれる。

いつのまにか「おらが村の商店街」という意識が地域に生まれてきたのかなあと思いましたね。

### 地域って何ですかね

震災のフォーラムにパネラーとして参加することが決まったときに、婦人会の方から「あんだ。しっかりやらなあかんよ。」と激励を受けました。また、商店街で大学生の受入をしてますけど、たまに「なんとかしたらなあかん」と思う学生がきますねん。考えて

みたら、婦人会は親の年代、大学生は子どもの年代、そのときに「地域は家族」やと。地域を家族として考え、老人会、婦人会、学生から小学生までいろんな世代をまきこんで、地域の人たちをまとめて活性化しよう、ここの商店街を中心として活性化・まちづくりを考えましたね。はじめ、商売人が地域づくりいうたら色眼鏡で見られたんです。だから、信頼を得ようと地域にどんどん飛び込みました。今、弱くなっている商店街があるけど、地域とのつながりを疎かにしているんじゃないかと思えます。

### 今後の目標を教えてください

じいさんがここで商売をはじめて半世紀。灘は創業一五代目の酒蔵など歴史や伝統を感じる地域。今でも、商店街の長老から、昔

あんだのおじいちゃんからお菓子もろたでどうれしそうちに話してくれるし、お父ちゃんに世話になったから何かあれば手伝うでと聞きますねん。これが地域のつながりのスタート、これを積み重ねていくのが歴史やと思います。私もこの地域で歴史を積み重ねたい、うちの息子で四代目、三代続いたら江戸っ子らしいから私も生粋の兵庫っ子。これからも次の世代につなげていく歴史の基盤、基礎づくりをしていきたいと思ってます。



「商店街は地域のコミュニティの中心やから商店街でがんばってる。」と海崎さん

### 共に働く仲間や集落の人たちが喜ぶ顔がしごとのエネルギーに 増田大成さん (NPOひょうご農業クラブ理事長)

人口減少が進む標高六〇〇以上の山あいにある宍粟市千町(せんちょう)集落。ここで、住民と共同で休耕田の再生を軸にした地域おこしに乗り出している「NPOひょうご農業クラブ」理事長の増田大成さん。

コープこうべを四十年間勤めたのち、退職後にNPOを立ち上げ、都市と農村に足場を置きながら、食と農を通じた地域づくり、農村と都市の地域間交流事業に取り組まれています。

農業や集落に取り組むことになったきっかけ、しごとのやりがいなどについてうかがいました。

### 若い頃はなにをしてはったんですか

コープこうべで二十五年働いて、その後十五年は役員、最終は副組合長、とにかく学校をでてから四十間コープ一筋で、退職後にNPOでひょうご農業クラブを立ち上げたんです。

### コープにいたころから地域で何かしようと思っただけではったんですか

震災後、コープこうべの再建するには、地域に立脚して、地域と一体になった生協にせなあかんと思っただけ。退職後にその延長で地域福祉の生協を考えただけ、設立が難しくて、NPOで地域福祉をやろうと。福祉とは健康で生きできる世の中づくりのことやから、健康に直結しているのは食、食を支えるのは農業やと考え、赤穂、上郡、相生で畑を借りて農業

を始めました。

NPOは生協関係の仲間と立ち上げて、畑でつくった作物を六甲アイランドの朝市で売ったり、レストランもやりましたね。また、相生でも商店街の空きスペースを使って、週一回の朝市を始め、他の空きスペースを店舗兼レストランではじめたんですが、かなり好評で、レストランだけでなく、高齢者向けの配食もやりました。

### 千町に関わるきっかけは何ですか

県から集落アドバイザーに委嘱されたんです。当時大学の監事を務めていたんですが、大学も地域貢献活動をしようという動きもあつて、大学の先生と集落を回ったんです。集落の再生を通じて大学も元気になったらええなと思っただんですが、結局は、大学と別に千町集落に入り活動を始めました。

はじめ、こちらの提案・活動に、集落はあまり動きはなかったんですけど、ある時から積極的に関わってくれるようになりました。活動を認めてもらって、信用してもらったのかなと思ったんです。当時、水害もあつて、農地がだいぶやられたんですが、そんなときに私たちが出入りしてたから使ってみよかという話になったのかもかもしれません。

### 千町の魅力は何ですか

どこでも村が街化（まちか）してるけど、千町は村のなかの村。

村が村として古いものを残しながら行んでいるのは素晴らしい。そのモデルを千町でやりたい。村の人もたくさん人が来て、村が荒らされることは望んでないし、環境、観光で誰でも招くんやなく、厳選せなあかんと思っています。

### これからの農業に大事なことは何ですか

野菜をつくる、加工することも大事ですけど、それを活かして山菜料理や郷土料理の店を営む、また、農業体験、山の散策、自然体験ができるような場が千町でできないかと思っています。

現在、佐用の平福という集落にも力入れてます。集落の人に「一人ブランド（いちにんいちぶらんど）」というてます、それをひょうご農業クラブが発売元で売るとすると、ある程度のレベルで確保して売らんとあかんのですが、参考になるのが掛保の米、個々の家で作っている、そうしたものを我々がインターネットで販売できたらと思います。

### 今のしことに駆り立てるものは何ですか

一緒に働く仲間や集落の人たちの喜ぶ顔がエネルギーになっているのは確かやと思います。

私にとって千町のプロジェクトが最後かなあと、ここまでこれたのは、生協で四十年、利益至上でなく、みんなの幸せを共同で作っていくことを学んだおかげや思ってます。

退職後にたまたま集落に巡りあつて、これを何とかするのが私の仕事やと思つて、今ががんばっています。



「新しいことを新しい場所です始めることはエネルギーがいるけど、今は楽しい」と増田さん

### 昔から伝わる食品加工や伝統食の技術を掘り起こし、伝えていきたい

大封香代子さん（養父市建屋手づくりパン工房「こうめや」店長）

手づくりパン工房「こうめや」さんは、緑豊かな養父市建屋（やぶし・たきのや）にあります。

「こうめや」さんは、築百年の民家を改装し、一階に販売所・作業所、二階に事務所を構えています。手作りパンは、道の駅の直売所やインターネットでも購入することができます。

愛知県蒲郡市のご出身。学生時代からの趣味を生かし、「パン工房」を起業。四人の子育て中である大封香代子さんに、但馬で活動をはじめた経緯、現在の活動、今後の目標などについてうかがいました。

### なんで但馬にきはつたんですか

子どもの頃テレビで見た「アルプスの少女ハイジ」というアニメがあつたんですけど、そこでの農村生活、自給自足の生活への憧れがあつたんです。

北海道の大学へ進んで、食品加工を学んだんですけど、そこに獣医を目指していた兵庫県出身の夫と出会ったんです。

夫がヨーロッパに留学し、そこで農村暮らしを体験して、加工食品も自家製にこだわる生活に触れました。

夫が、兵庫県農業共済組合連合会の獣医師として採用され、平成五年、兵庫県山崎町に住むことになったんです。その後、将来、但馬牛の繁殖牧場を経営したい、という夫の願いがかない、但馬に転職になって、平成八年四月、現在

の地で、民家を借り受けて、憧れの農村生活をはじめたんです。

### パン屋を起業したきっかけは何ですか

学生の頃から趣味でパン作りをしていました。ここでは近所からよく野菜とかいただくのですが、野菜のお返しにとプレゼントしていた手作りパンが好評でした。

トライ・やる・ウィークの中学生と一緒に保育園でカレーパンを作ったのがきっかけで、パン作りを教えて欲しいという依頼がくるようになったんです。

主人が会社を辞め、獣医（大動物専門）と牛繁殖の経営を始めました。BSEの影響により、子牛の販売価格が下がり収入が減り、生活が不安定になってたんです。そこで、パン作り教室から憧れのパン屋を起業しようと決意し

ました。かつて、おんなの仕事作りセミナー”を受け、生き生きと仕事をしている女性経営者の姿に刺激を受けた影響もあったと思います。

平成十五年二月に商工会に相談し、九月には開業しました。売上は平成十六年に六百五十万円、昨年度は平成十六年度の約三倍の売上になりました。スタッフは八名、母を含め、地域の元気なベテランスタッフに助けてもらってますよ。

その他、平成十九年には、若手専業農家の女性七名で、七つづの種”グループを立ち上げて、活動をしています。平成二十年からは生活研究グループの有志で食農教育活動に特化した「わくわく食農クラブ」を立ち上げ、リーダーとして会の運営にあたっています。

### 今取り組んでいることは何ですか

「山椒を炊く」「かまどでご飯を炊く」など昔から伝わっている食品加工、伝統食の技術が途絶えようとしていますね。今年、養父市の事業で五歳児にかまどでご飯を炊く体験を計画しています。昔からあった食品加工や伝統食の技術を掘り起こして、ノウハウを蓄積し、次の世代に伝えていきたいです。

### 但馬のいいところは何ですか

但馬は空間も時間もたっぷりあり、何にでもじっくり取り組める場所です。また、都会の人にとって、ここはいるだけで癒しの場所になると思いますよ。何もしなくてぼおとする時間と空間を提供したいですね。

また、事業をしていてわかるのですが、但馬の良さは、土地も安

く、良質な原材料も豊富なことです。これをうまく組み合わせていくことにより但馬は、可能性のある地域になると思っています。

三〇年後、子ども達には自立して生きていく力を身につけ、私たちが但馬を選んだように、但馬で生活をしてくれたら、と思っています。



「将来の夢はたくさんありますが、宿の女将になりたいですね。」と大對さん

### 必要とされていることがわかる ことがことのやりがいに

細川大介さん

(朝来市生野町奥銀谷地域小規模集落サポーター)

朝来市奥銀谷(おくがなや)地域は、同市生野町の東部に位置し、新町、緑が丘、奥銀谷、黒川地区など八地区から構成されています。

生野銀山閉鎖後は、急速な人口減少が進み、現在の人口は約一千人、世帯数は約五百弱と最盛期の四分の一になっています。

今年五月から、奥銀谷に常駐し小規模集落サポーターとして活躍する大阪府堺市出身の細川大介さん。小規模集落サポーターのやりがいや地域に住んで感じていること、今後の目標などについてうかがいました。

### 何で小規模集落サポーターになりましたか

生まれも育ちも大阪府堺市です。大学卒業後、大阪の難波で飲食業の仕事をしていました。そのときにたまたま、早番で夜八時半ごろ帰るときにコンビニエンスストアでお弁当とお茶を買う一人の小生を見ました。この小学生が一人で晩ご飯を食べているのは健全やないなあ。もともと子どもをはじめとして人と人をつなぐ仕事に興味があったものです。

それで、不登校支援など社会とのつながりづくりをしているブレインヒューマニティというNPOが兵庫県西宮にあると聞いて、十月から関わりはじめたんです。

住まいも西宮に転居し、本格的にNPO活動に関わろうと三月末に仕事を辞めて、四月から不登校

のプログラム補助などに携わりました。

その頃、ブレインヒューマニティ事務局長さんから小規模集落サポーターの話をお伺いしたんです。

人と人をつなぐ仕事で、また、地域活性化にもなると思って、この仕事に飛び込んだんです。

### ここに住んでどうですか

五月中旬から住むようになったんですが、最初にびっくりしたことが、家の鍵をしているとご近所さんから「えらい警戒しとるなあ。」と冗談まじりで言われたことでした。

鍵をかけるのは当たり前やと思ってたんですが、今では長期で家を出る時以外は鍵をかけなくなりました。鍵をかけてると地域と切断されているような気になります。自分でも不思議ですけど。

はじめはどんなしごとをしたんですか

奥銀谷地域協議会の拠点施設「かながせの郷」は六月五日に開所したとごなんですが、開所準備と同日に開催された総会のお手伝いをしました。

施設の開所、総会ということたくさんの人に出会って顔を覚えていただけるよい機会でした。

五月に集落を訪問させていただきましたが、この期間を境に少しみなさんとお近づきになれた気がします。

この地域はどんなところですか

ここは、私が小学生の頃の堺市の雰囲気と似てるところがあるんです。一人暮らしなので、近所のひとに気にかけてもらってるというか、「帰りにご飯をとりにおいで」とか、家に帰ると玄関に食材

やおかずが置いてあるんです、ほんまにびっくりでうれしいです。

自宅に呼んで下さることもあります。この前、盆踊り大会をするのでグラウンドの草刈りをお願いしましたが、六十人もでてきてくれたんです。自分たちの地域だから、作業も一人でも多い方がいい、地域への愛着、つながりを感じます。

しごとのやりがいは何ですか

地域行事や小規模集落元気作戦アドバイザーのお手伝い、大学生のワークキャンプ（集落での農業のお手伝い）のコーディネーターなど集落とまち、集落と学生をつなぐ仕事をしています。私を必要としてくれていることがダイレクトでわかるんです。それがしごとのやりがいになってます。

これからこの地域で何をしたいですか

現在、大根プロジェクト（交流農園モデル事業）を進めています。

耕作放棄地を都市部の若者にきてもらって農業の再生を図り、集落の活性化を図る、これを毎年継続できる基盤づくりをしたいです。そして、この地域に興味をもつて好きになってくれる人が増えたら、地域の良さも変わらず残っていくと思うんです。そのためにも頑張っていきたいですし、地域が良くなる何かを残していきたいと思います。



「息子ぐぐらいの年齢だけでよくやってくれますよ」と協議会副会長の田中さん（右）。「サポーターなんですけど逆に助けていただいています」と細川さん。（左）

農業を若い世代につなぎ、地域の環境を守っていききたい

君塚昌俊さん

(NPO法人いちま丹波太郎事務局長)

丹波市市島町の国道175号線沿いに、地元産の有機野菜などの直売所であり、丹波で農業を志す人たちを支援する「NPOいちま丹波太郎」の事務所があります。事務局長の君塚昌俊さんは、都会のメーカーで六年間勤務されていましたが、三十一歳で市島町を訪れ、農業をはじめられました。

神戸・大阪での出張販売も手がけている君塚さんに農業に取り組んだきっかけ、新規就農を目指す人へのアドバイス、丹波の魅力、これからの目標などについてうかがいました。

農業を始めたきっかけを教えてください

もともと、森林の生態や森林保護について学生の頃から興味を持っていたんです。

当時環境保護という言葉はなかったんですが、環境を守るためには人に頼らない生活、全てが自給自足は無理なんですけど、せめて食料は自給しようと農業にたどりついたんです。会社員のころ、新しい技術をいかに需要に結びつけるかを考えるしごとをしていたんですが、これはすればするほど環境破壊につながるんです。その生活を続けたくないと、会社を退職した後、和歌山の共同農業で三年間研修を受けました。

神戸の生まれですが、丹波は土地勘もあつて、有機の里である市島町にたどりつき、農業をはじめ

ました。

なぜNPOを立ち上げはったんですか

町が公募した「まちづくり専門員」に三年間携わったのですが、行政よりもNPOの方が動きやすいと思い、地元食材の地元消費を目標し、地域の農業を活性化しようとしてNPOを立ち上げました。そのころ、新規就農を目指す人たちの相談窓口になってほしいと行政から依頼があり、就農相談、住まいや農地探しの支援などを続けています。また、道の駅などで各地に直売所ができ、ここでもっと要望も大きくなってNPOで直売所もはじめたんです。

新規就農を目指す人にどんなアドバイスをされていますか

確かに新規就農者は増えていきます。都市部でサラリーマンをし

ていた方が多く、縁もゆかりもな  
いインターンの人が多いです。

就農相談ではまず、農業は農地  
や機械など資源を持っている人が  
やめる厳しい状況、そして技術も  
ない人が入っていくことは大変な  
のでやめたほうがいいですよと説  
明します。やるからには覚悟を決  
めてくださいと。

女性の新規就農の相談もあり  
ます。最近では、ごまの有機農業  
をするので東京の大学を卒業した  
ら就農しますと。縁もゆかりもな  
い方ですが、いろんな農業  
体験をし、丹波で始めることを決  
めたそうです。現在、この方に適  
当な住まいを探しています。

### しごととのやりがいを感じるこ とは何ですか

がんばって農作物をつくり、楽  
しそうにやっている新規就農の方

の姿や直売所に農作物を出すこと  
を楽しみにしている高齢者の方、  
地元の食材を選んで買っている小  
学生や中学生のことを聞くとうれ  
しくなりますね。

### 丹波の強みは何ですか

ここには、山、川、畑など資源  
が身近にあります。小水力発電も  
利用できる場所がたくさんありま  
す。

山にはイノシシや鹿がたくさん  
いますから、食料も地元で調達  
できますよ。地元の人に聞くと丹  
波は何もないよと謙遜されます。  
私のようによそから入ってきた人  
間から見ると資源ある豊かな地域  
です。

農業は草刈りをはじめとする  
地域の共同作業の一部ですが、子  
育てをしても誰かがどこかで  
見ていてくれるという安心感があ

りますし、何かあればしかつてく  
れます。子育てにもいい環境だと  
気づきましたね。

### 目標を教えてください

会社員のころ、海水の淡水化装  
置の建設で中東に半年行きました。

緑のない砂漠の光が眩しい中  
東から日本に帰り、改めて山、森  
など緑の素晴らしさに気づきまし  
た。丹波の貴重な農業を守り、地  
域の環境を守っていく就農希望者  
の支援に引き続き取り組んでいき  
たいです。また、旧村単位で自給・  
自立し、できることは地域自ら取  
り組む地域になればと思います。



「丹波」ブランドは有  
力です。加工品など新たな展開  
も考えています」と君塚さん

### 豊かな海を、あとを継ぐ若い人 たちに残したい

森 義政さん

(東浦森漁業協同組合代表理事組合長)

東浦森漁業協同組合は、淡路島  
の東側、大阪湾側を漁場とする。

「御食国(みけつくに)」と呼  
ばれる食の宝庫・淡路島は、魚や  
海苔など豊かな海の恵みにあふれ  
ています。それでも、以前と比べ  
ると姿が変わってしまったとも言  
われます。

豊かな海を取り戻し、次代を担  
う若者たちに引き継ごうと、さま  
ざまな取り組みを行っておられる  
東浦森漁業協同組合の森義政さん  
に、どんな取り組みをされている  
のか、その苦勞やこれからの海に  
かける思いなどをうかがいました。

### 淡路の海はどう変わったんですか

昔は貝が住める海岸でした。鉄  
板を入れて地下水の湧き水を止め  
たのが失敗の原因だと思うんです。

それまでは、湧き水があつて海  
底にも空気が入りました。湧き水  
が止まってから、海底の砂がヘド  
ロ化してきたんです。昔は、上の  
ため池に水がたまっていると、地  
面にしみこんだ水が湧き水となつ  
て、海底に湧いたんです。

砂防ダムなどで防いだために、  
土砂崩れを防げるようになったか  
わり、山からの砂の供給も止まり  
ました。第二室戸台風など災害が  
続き、自然災害から守るために護  
岸を整備しました。それが、自然  
災害から守る代わりに自然の恵み  
を壊したのです。陸から泥が入つ  
て、栄養分を海にまくことが必要  
なのです。これまでの長い歴史で、

泥が海に入ったからという理由で、  
魚や貝がいなくなったことはない  
でしょう。

### どんな取り組みをされてはります か

砂が小さくなり海底が締まっ  
て固くなっています。イカナゴは  
二〇℃を超えると砂に潜るのです  
が、砂が締まって固くなっている  
と潜れません。そこで、5〜6年  
前から、海の底を掘り返す海底耕  
運というものをはじめました。そ  
れから、海底の砂をすくうと中に  
イカナゴがいるようになったんで  
すよ。はじめ、どうしたらいいか、  
と考え、自分たちで機械もつくつ  
たんです。駄目でもともと、とに  
かくやろうと、まず行動しよう  
ということですね。とにかくやつ  
てみないと、漁師は食つていけま  
せん。

ため池浚いも手伝うようにしました。池の腐葉土を浚うことは、保水量アップと環境改善を果たすとともに、海にもいいことのはずです。

十一月はのりの養殖で忙しいですが、その時期にため池浚いをしています。若い者たちには協力しろ、と言っています。

### 海はどんな環境にあればいいんですか

昭和四〇〜五〇年代は魚がたくさんいましたよ。淡路島の人口が最大だったのは二十年くらい前で、その頃、下水道はありませんでした。でも、その頃の海は富栄養化していません。人が減って、下水道を整備して、それでいて水生の動植物が生きていけない海になってしまったのです。海を畑と見るなら、ある程度の肥料が必要

です。今の下水処理のやり方は、漁業者の立場から見ると良くない。

むしろ漁業者にとって、汚水処理した水は有害な水です。多少赤潮が出るくらいの方が魚はよく育ちます。「水清ければ魚住まず」という言葉通りです。海に定点を決めて栄養濃度を測り、窒素等の上限を決めて下水を流すことはできませんが、年間どれくらいまで許容できるかを決め、夏は上限を抑え、冬には下水を出すといったことも考えられるでしょう。魚も海藻も秋から冬に産卵しますから、そのときに栄養を与えれば成長を促せます。水生動植物の生息しやすい環境こそが良い環境ではないでしょうか。きれいであればよいのではなく、豊かな海であるべきなんです。

### 目標を教えてください

海をつくらないと、若い人たちが働くところがなくなってしまいます。模索してとにかくいろいろとやってみて、若い者に海の恵みを得るためのバトンを渡したいと考えています。海を壊したのは人間ですから、治せるのも人間のはずです。

そのために、海底耕運やため池浚いをはじめ、海を治すための活動を長く続けていこうと思います。



「これが仲間と考案した海底耕運機です」と森さん

### 兵庫県でどんなところで聞かれたときに淡路島があるところって言われたいですね 山口 久仁子さん (NPO法人淡路島アートセンター理事)

淡路島を主なフィールドとして、アートプロジェクトの企画・運営をおこなっている「NPO法人淡路島アートセンター」理事の山口久仁子さん。

二〇〇五年にNPOを立ち上げ、同年から淡路島アートフェスティバルを手がけ、名刺に「淡路島を耕す女」という肩書きをつけている淡路島出身の山口さんに、現在のしごとに取り組むことになったきっかけ、淡路島の魅力や可能性などについてうかがいました。

### 現在のしごとをするきっかけは何だったんですか

二〇〇四年の台風二十三号がきっかけなんです。豊岡の被害がすごかったんですけど、淡路もひどくて、壊滅状態と思うぐらいまちが黄土色一色になったんです。

役場から電話があつて、崖崩れで全壊の状態の空き家があるんですけど、家督相続の関係で所有者はあなたです、撤収するには数百万円かかります、一割は役所が負担しますがどうしますかということでした。自分の所有する物件があることがわかりましたが、それはマイナスになるような物件、とにかく現場に連れて行ってもらったんです。

空き家を見ると撤収できるかなど、まとまったお金もないし、片付けを始めました。いろんなメ

ンバーが集まってその作業を手伝ってくれました。

その空き家で出会ったのが大工さんの技術です。天井板で見えなくなっている梁の部分の接ぎの手法の匠の技など、見えないところに大工さんの技術がある、空き家は素晴らしいと。そして、空き家をクローズアップしたり、インベーションするプロジェクトを立ち上げて、空き家を使った淡路島アートフェスティバルを開催したんです。

でも、地域に入つて、若い人が何かすると不審がられるんです。

地域から信頼されるものとしてNPO法人にしました。

### 淡路島は好きですか

淡路島で育つて、大学は島外、その後帰ってくる機会があつたんですが、高校の頃は本当に地域が



嫌いで、昨日遅かったとか、何時に帰るとか近所の人に全部知られてるんです。それがうつとうしくて、当時、自分に刺激を与えてくれるもの、楽しいものは、島外にしかないと思ってました。

しかし活動するようになって、最初はいやだった、うつとうしいことがなんだかかけがえのないものになってる、自分が歳をとったせいかもしれないけど、方言が愛おしかったり、あとはやっぱり人、ここにしかないかけがえのないものは人だと最近感じています。

淡路は、施設に観光に行く場所というよりもカルチャーショックを受けるような出会いだったり、まちなかだったり、そういった気づきのある場所にならないかな、そして、例えば滋賀県なら琵琶湖のあるところ、兵庫県なら淡路島

があるところって言わたいですね。

淡路島は、島外、外の人から認識されて、島の必要性を地域の人と共有していく必要があります。都会があるから田舎が必要だということでも、田舎の必要性をどんどん都会の人に言っていきたい。

また、淡路島の人たちが自分たちの島に無関心になっていくことは致命傷、これからもどんどん外に発信して、その現状をキャッチした島外の都会の方から島はこうあるべきというのを強く発信し返してほしいですね。

### 三十年後の淡路島はどういう地域になっていればいいですか

三〇年後に理想として持ち続けたいのは、島民全てに役割があつて、自分の気持ちのなかに「これや」と思うものがあること。そし

て、自分の役割を認識して、地面にすくつと立つという姿ですね。

### 目標を教えてください

私は、一生耕す女でいたいんです。いつも耕しておいて、根がつきやすい状況を地域のなかでつくっていきたい、それにすごいやりがいを感じていますし、アートをいうものを介在させて一生続けてやりたいなあと思っています。



「今後、「由良井講座」という淡路の方言の講座をやりたい、そして実践できたら面白いな」と山口さん

ひょうご・らんな一ず  
一未来への道普請

平成22年9月

編集 兵庫県企画県民部政策室ビジョン課  
電話 078(362)4313